
蠟燭の灯火

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蠟燭の灯火

【Nコード】

N8119C

【作者名】

快流緋水

【あらすじ】

希望を失ったとき 逢いたい人がいた。笑ってお別れを言うために。

前編

病院から帰ってきて、ベッドの中にもぐりこんだ。そうでもしないと、落ち着かなかったのだ。

階下から両親が言い合うのが微かに聞こえてきた。それは怒りでもあり、悲しみでもあり、むなしさでもあった。

『なんであの子なのよ……!!』

母の泣き叫ぶ声が聞こえた。父はなにも言い返せなかったようで、それ以降なんの声も聞こえなかった。

健康診断でした血液検査により、白血球が激減していることが分かった。もちろん、1回だけの検査では分からない。だから、期間を置いて2回再検査を行った。他の数値は変動がほばないのに対して、白血球は下がる一方であった。

この再検査の間に、4回ほど貧血のような状況で倒れてもいた。明らかな異常。

精密検査をし、その結果下された診断は急性白血病。よくドラマや小説に出てくる病気が、としか思えなかった。

死ぬんだって。

だが、これは現実だ。

確かに身体に力が入らず、常に虚脱感を持っていた。おまけに軽くひとっ走りしただけで息が切れ、呼吸が元に戻るまで時間がかかった。

(いつの間に?)

遥^{はるか}はため息をつき、寝返りを打つ。

母の号泣が収まると、父は母にそつとお茶を差し出した。だが、その手は震えている。

『俺だって遥がそんな病気にかかっただなんて信じたくないんだよ。』

湯気の立つ湯飲みに触れようとせず、ただ俯いて絞り出すかのよう
に言った。

『だけど、なんであの子なんです？リレーの選手になったり、色々
な部活から引つ張りだこだった子なのよ。元気そのものなのに……』

涙で目を赤くした母が悔しそうに言う。

『本当にそうだな。』

父は頭をかきむしり、首を振る。

『代われるもんなら代わってやりたい。』

次の日。遙は吐き気に襲われていた。両親の気遣いで、好きなものばかりを用意してくれているが、一切のどに通らない。

『遙、食べないと元気になれないわよ。』

母が口元まで持っていくが、遙にとっては匂いだけでもダメで顔を背けるばかり。

『ゴメン、無理。もういいよ、どうせ死ぬんだし。』

そう言い、布団を頭から被る。すると、母の啜り泣きが聞こえてきた。

泣きたいのは遙も同じだ。

家での療養は無理と判断され、翌日から入院となった。

骨髓が合うのなら家族とすぐにも手術をするのだが、誰一人合う人はいなかった。こうなれば、骨髓バンクを頼るしかない。

『遙、何かしたいことある？』

母はあれから目を赤くしたままだ。

遙は母の問いにしばし考え、それから口を開いた。

（死ぬんだよね、きつと。それなら。）

『あのね、お母さん。実はね、彼氏じゃないけど、凄く大事な男友達がいるの。その人に逢いたい。』

思いもよらない返事に母は目を丸くした。

『そんな友達いたの？』

『うん。』

遙は女子高と女子大に通い、男性との関わりはそんなに多くない。それが、大事な男友達がいると言うのだから、母が驚くのも無理はない。話題にすら出てこなかったのだから。

『どこで会ったの？』

遙はちよつと困ったように笑った。それがまた、とても儚げだ。

『インターネットで。』

母の顔が少しだけ険しくなる。だが、怒っても仕方がない。話を聞いて、願いを叶えてやりたいのだ。

『そう。』

『出会い系じゃないよ。音楽繋がりだから。ほかにも色々と相談に乗ってくれてね、もの凄く優しいの。』

心配をさせないよう、やつとのことです手を伸ばして母の肩に触れる。
『凄く良い人なんだ。』

母は複雑な思いを胸に抱きながらも遙の手に触れて握った。

『分かったわ。その人に会いたいよね。』

『うん。』

（お別れを言いたい。）

『どうしたらいい？連絡先分かるの？』

遙は携帯電話を指差す。母は携帯電話を取ってやり、遙に渡した。

『家に呼んでもいい？』

『いいわよ。』

『その間だけ、2人だけにしてもらっていい？』

母は唇を噛み締めたが、頷いた。

『あと、病気のことも言わないで。』

『その状態じゃ分かっちゃうでしょ？』

遙は軽く笑って首を振る。

『入院するまでの力を振り絞って元気になるわよ。笑っていたいの。』

母の目から思わず涙がこぼれた。

『あんたって子は。もう。分かったわよ。やりたいようにしなさい。』

『ありがとう。』

そう言い、早速大切な男友達を呼び出した。

後編

急に呼び出され、まして初めて家に招待されたとなれば驚き、拒否しそうなものだが、その大切な男友達はあまりの懇願に折れてやつて来た。

遥はにっこり笑って迎え入れる。

「いらっしやい、ひろき 紘輝。」

「ども、お邪魔します。」

紘輝は物珍しそうに部屋を眺めつつ、リビングのソファに座った。

「急にどうしたんだよ？」

「いいじゃん、別にー。紅茶でいい？」

「ああ。」

遥は大好きな紅茶を淹れ、紘輝に差し出す。

「ね、この間コンサートに行っただんでしょ？」

遥は込み上げてくる吐き気を抑えつつ、笑って聞いた。

紘輝は何も気付かずに、笑ってコンサートの状況などを話した。

共通の話題は中々尽きず、気付けば3時間以上経っていた。紘輝もさすがに初めて来たことでもあるから、そろそろ出ようと立ち上がる。

「今度は一緒に行こうよ。」

「うん、そうだね。」

玄関まで見送り、その時に遥は手紙を差し出した。今の自分の状態など、大切な内容の手紙だ。

「ラブレターじゃないけど、お手紙。」

「へえ、珍しいじゃん。」

「まあね。」

「じゃあな。ごちそうさん。」

「気を付けてね。」

遥は手を振って見送り、紘輝が見えなくなったと同時にしゃがみ込

んだ。荒れてくる息をなんとか整えようとし、冷や汗を手で拭う。
5分ほど経った頃、玄関のドアが荒々しく叩かれた。びっくりするが、なんとか立ち上がって開ける。そこには汗だくの絢輝が立っていた。

『なんで？』

『なんでじゃねーよ、バカ！』

そう言うなり、遙を抱きしめた。

『病気なら病気って言えよ。それに、この手紙。死ぬみたいじゃん。んなこと言っなよ！』

率直な言葉に、遙の目から涙があふれ出た。

『だって、死ぬかもしれないんだもん。だったら笑ってバイバイしたかったの。』

『なに強がってんだよ。』

絢輝は更にぎゅっと抱きしめる。

『お前はいつも抱えてばかりだな。』

『だけど、だけど……今度ばかりは分からないんだもん。だから、死んだって絢輝のこと感謝しているって、大好きって言いたかったんだよ。』

絢輝は少し離れ、遙の頬に手をやった。

『そう言ってくれるのはありがたいけどな、死なれちゃ悲しいんだよ。負けんよ。俺も応援するから、生きろよ。』

遙の涙は止まらずばやけたままだが、それでも絢輝の顔を見上げた。
『本当に？』

絢輝は困ったように微笑み、それから遙の頭をくしゃくしゃ撫でた。

『いい加減なことと言えるかよ、こんなの。本当だ。』

遙は嬉しくなって抱きついた。

『ありがとう。』

苦しい思いが込み上げてきたが、それ以上に温かい感情が包み込むように、遙は痛さを忘れてこの瞬間を喜んだ。

紘輝が帰ったあとに戻ってきた両親は、はらはらしながら遙の部屋に行った。

『遙？』

『なあに？』

返ってきた声は若干明るかった。不思議そうに近寄り、ベッドのそばに座る。

『大丈夫か？』

父の心配する声が温かった。

遙は両親に顔を向け、にこっと笑った。まだ泣いたあとの赤い目だが、儚げだった笑みではなかった。

『頑張れば生きれるよね？』

思いもよらぬ問いに、両親は泣き出しそうになった。

『遥なら大丈夫。すぐに良くなるわ。』

『ああ、そうだな。お父さんも一緒に頑張るぞ。』

遙が手を伸ばすと、両親が競うように手を握りて来た。

『一緒に生きるね。』

遙の言葉に、両親は涙がこぼれだした。

『そうだ、生きような。』

先の見えぬ、それこそどちらに天秤が傾くのかも分からぬ状況だが、それでも希望を繋げることが出来た。

遙は携帯電話を見る。消えかけた思いが、また燃えてきた。そのきっかけとなった紘輝には感謝し尽くせないくらいだ。だが、少しでも感謝をしたら、まずは生きること。

遙の挑戦は今始まったばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119c/>

蠟燭の灯火

2010年12月22日14時38分発行